

異文化体験

ドイツ・フライブルク大学主催の
「日本人学生のためのドイツ語サマープログラム」に参加して

ドイツ南西部にあるフライブルク大学で「日本人のためのドイツ語サマープログラム」が開催され本学からも2年次生を中心に14名が参加した。今回から国際局と語学教育センターの共催になり、申し込み方法や現地でのサポート体制などいくつかの変更点があった。しかし授業や催しには何ら変更はなく大変充実したドイツ滞在の機会が提供された。ドイツ語が選択となり最初の2年次生が参加したが、参加者が従来よりも10名近く減少したことは残念であった。それでも本学からの参加者のために、フライブルク大学は医学部付属病院にある院内薬局の見学を開催していただくなど、便宜を図っていただいた。これも長年わたる多数の参加者を送り出している本学への敬意の表れである。「異文化体験」というタイトルで今回のサマープログラム参加者の代表にドイツでの体験や思い出を投稿してもらった。1ヶ月という大変短いドイツ滞在であったが、参加者にとってとても充実した意義深いプログラムであったことがうかがえる体験記である。この文章を読んで関心を持ったならば是非とも次回、人生観が変わるような異文化体験をしてほしい。2014年もさらに充実したサマープログラムが予定されている。これだけの期間外国で自由に過ごせるのは、そう今でしょう。

桑形広司（ドイツ語担当准教授、日本フライブルク会会員）

（注）ドイツでは18歳以上の飲酒は合法です

サマープログラムに参加して 2年次生 福田 大祐

この夏の8月、短期語学留学という形でドイツのフライブルクで過ごしました。将来、大学を卒業して社会人になってからでは海外留学という経験はなかなか出来ないものですし、このプログラムの存在を知って行こうと決めました。

初めての海外での生活に、最初はいろいろ戸惑うこともありましたが、すぐに慣れて毎日が楽しい日々でした。学生寮ではいろいろな国から来たルームメイトがいました。少しくールな感じのドイツ人や、日本好きなトルコ人などいろんな人がいて、寮で会うといつも明るく話しかけてきてくれました。ドイツ語での会話は難しいので、たどたどしい英語で会話していましたが、一生懸命耳を傾けて話を聞いてくれる優しい人ばかりでした。

フライブルク大学では、平日の午前中に2コマのドイツ語の授業がありました。各々のレベルによりクラス分けがされ、ほとんどドイツ語と英語のみで授業が行われるクラスから、日本語が喋れる先生がほとんど日本語で授業をしてくれるクラスもあります。授業では、基本的なドイツ語の文法から、ドイツでの生活で使える便利な日常会話も教えてもらいました。フライブルクで生活を始めた当初は、やっぱりドイツ語より英語を使ってしまいがちでしたが、授業で習ったドイツ語を使ってみて実際に通じた時は嬉しかったです。

ドイツでの生活で一番楽しかった思い出は、友達といろんな所へ行って過ごした時間でした。フライブルクは、地理的にもスイスやフランスにも近く、

スイスのバーゼルや、フランスのアルザス地方のコルマル、フランスのパリへも行きました。ヨーロッパパークという、1日では遊びつくすことが出来ないほどの、ものすごく大きい遊園地へも行きました。このサマープログラムには1泊2日のツアー企画もあり、バイエルン州にあるノイシュバンシュタイン城へも行きました。城内は見学もでき、近くの橋から眺める城の外観は素晴らしく感動しました。サマープログラム参加生向けに、様々なレクリエーション企画もされていてビアガーデンに行きましたが、そこでは他の日本の大学から来た人とも交流して友達も出来ましたし、ソーセージを食べてビールを飲んで、賑やかにお喋りしてとても楽しかったです。

このサマープログラムでの経験は、自分にとって勉強になることばかりでした。日本とは異なる異文化の地で生活して、刺激的で楽しい日々を送ることができ、自分の視野も広がったように思います。この夏、とても素晴らしい経験ができたことを感謝し、これからの人生に生かせればよいなと思います。Danke schön!



お別れパーティでのクラス写真



フライブルクの展望台からの街並み

Prost!

2年次生 花井 拓斗

ドイツから帰国してから知ったこと。ビールでの乾杯はドイツ語でProst、でもワインでの乾杯はZum Wohlとあって少し上品な感じになるとか。機会があれば今度使ってみようと思う。

この夏、ドイツに1ヶ月間滞在して、フライブルクのみならず遠くの街や他の国に行ったことで、建物や自然を見物し、食や言語などその土地ならではの文化を体感することができました。有名な観光地も周遊し、たくさんの思い出作りができたように思います。しかしながら、こうして文章を書くにあたってドイツでの生活を振り返ると、そういった思い出よりもむしろ、ドイツで1ヶ月間暮らした、その日常生活での思い出が一番に頭に浮かびます。

授業開始当初、全く授業についていくことができず大苦戦でした。1年間大学でドイツ語を勉強していたのにも関わらず、単語力が決定的に欠けていたため、当然のようにドイツ語しか話さない先生の説明が、何一つ理解できませんでした。また、そんな授業にも平然と対応する他の学生を見て、ただ焦るばかりでした。そんな状況でも挫折することなく1ヶ月を乗り切ることができたのは一緒にいた仲間たちのおかげだと思います。というのも同じクラスの京葉メンバーも皆自分と同様かそれ以上に授業についていけないことに不安を覚えていることが分かり、だからこそ自分はしっかりしなければと思うようになったからです。出された宿題を一緒にこなし、授業中も助け合うことでお互いに高めあうことができたのではないかと思います。授業が終わりに近づくにつれ、先生の説明が聞き取れるようになり、街を歩いても標識が読めるようになっていたり、店での値段が聞き取れるようになっていたりして、成長を実感する

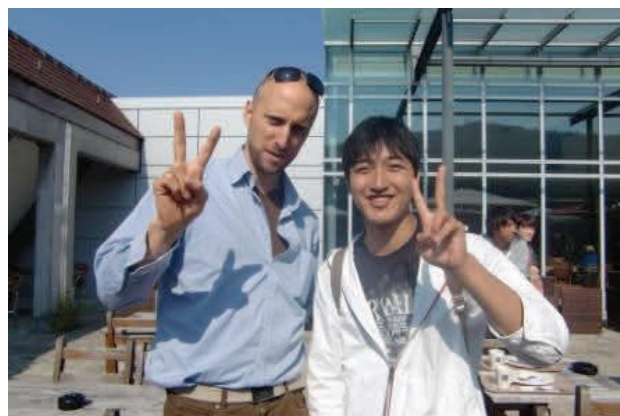
ようになりました。

そんな本学のメンバーたちとは授業だけではなく日常生活でも共に行動することが多かったです。授業が終わっては、街に繰り出し昼食を食べ、ときにはレクリエーションに参加し、時には寮の部屋に集まって皆で翌日の予定を話し合ったり、ビールやワインで乾杯したり。遠出する時もたいていは一緒でした。ヨーロッパパークに始まり、スイス「バーゼル」やフランス「コルマー」、フュッセンやフェルドベルクなど、思い出を振り返ればキリがありません。本当に充実の1ヶ月でした。

さて、ドイツから帰って数カ月たちますが、今でも時々ドイツ語が口をついて出てくることがあります。また、ドイツ語は自然と耳に留まります。帰国した当時は日本のお金と値段の表示を見て、一瞬どう払っていいのか分からなくなったこともありました。辺りを見回してもドイツ語の表記が全くないことにも違和感を覚えたほどで、たった1ヶ月なのに随分とドイツに染まってきたな、と自分でも少し感心するほどでした。また、ドイツ語に限らず、数々の失敗や様々な場面での拙い英語での会話などドイツでの経験全てが自分の成長につながっているのだと思います。そしてそんな成長も仲間たちがいたからこそだと思います。だから、そんな成長の機会を与えてくれた仲間たちとともに。Prost!



フライブルク市街地



担任のフィル先生と

世界ふれあい街歩きにあこがれて

もみやま

3年次生 初山 京子

私のドイツでの生活は人情に支えられた1ヶ月でした。寮が満室になり留学を諦めかけていた時、桑形先生の仲介でドイツのご友人の、そのまた友人に部屋を貸して貰える事になり、滑り込みで決まったドイツ行き。「フランクフルトからICE（高速列車）でフライブルクへ行き、ブライザハ行きの電車に乗り換える」だけを頼りに飛行機に乗りこみました。しかし隣の酔ってご機嫌さんの男性が気にかけてくれ、現地に着いてから息子さんにICEまで送って頂き、券売機操作やホームの番号まで教えて頂きました。フライブルクでブライザハ行きの電車を探した時も、時刻表が1時間ごとによすべての路線を一括表記するスタイルでさっぱり読めず、歩いてきたお姉さんに探してもらいました。全てが終わり就寝は22時でしたが、ようやく日が落ちた頃でした。大家さんのおばあさんはまさかドイツ語の話せない店子が来るとは思わなかったようですが、電子辞書を翻訳機代わりにドイツの生活やフライブルクとブライザハの歴史について教えてくれました。

ブライザハはライン川の畔にあるワインの産地で、対岸にフランスを臨む小さな町です。フライブルクまで都市近郊電車で30分とそれほど遠くありませんが、運行本数が少ないので初めは大変でした。滞在中にレール交換のための運休に当たってしまい、帰りの電車が来ずに呆然としていたところ、仕事帰りの男性が臨時バスの停留所まで引っ張って行ってくれました。ドイツに移民した方で、「語学は話さないで上手にならないから」といって、イリンゲンで降りるまでの間ずっと英語のブラッシュアップに付き合ってくれました。

この滞在で感じたのは、はっきり表現することの大切さです。笑顔で挨拶をすると強面のおじさんでもニッと笑顔で返してくれるし、そこから会話が弾んで町を案内してくれる人もいました。どの人も「教えて」や「困った」を伝えると、私の拙い英語に大きく！ため息をつきながらも最後まで助けてくれました。「君がしたいならそうしてあげるよ？」と言ってくれる事も多くて、とても印象的でした。しかし道を聞いたおばあさんに「車で送っていいですか？」と言われたのは、きつとんでもなく厄介な子だったから！

授業中にパメラ先生が「私たちにとって相手が何を考えているか分からないことは大変ストレスで、ディスカッションはむしろ全く問題ない」と毎回のように言っていました。本当にそうだと思います。日本でも実践したいです。寛容で生真面目で優しい人がいるドイツ。またぶらっと行きたいと思います。



ブライザハの高台より
川の向こうはフランスのアルザス地方



町の象徴である聖シュテファン大聖堂



ブライザハの街並み